倫風宏話

「今年こそ」の思いを持ち続けよう

上廣榮治

新年、明けましておめでとうございます。

今年もまた、皆様それぞれに新たな抱負を持って、一年の計を立てられたことと思います。

新しい年が明けてしばらくの間、私たちは「今年こそ」という、新鮮で積極的な気分の内にあります。松の内はもちろん、仕事始めの初出勤や初登校の日にも、「今年こそ、昨年とは違った特別の努力をしよう」と心に誓います。

この新鮮な気分は、恐らく春の頃までは持続します。なぜなら、わが国では四月から年度が変わる場合が多いからです。新しい学校に進学する、上の学年に進級する、新しい職場に配属される、それが四月だからです。春は「今年こそ」の思いをもう一度燃え上がらせる季節でもあるのです。

しかし、その新鮮な思いもいつの間にかしぼんでしまい、すべてがすっかり日常化していきます。当初は光り輝いていた決心も、しだいに色あせ、やがて忘れ去られていくのです。当然、実践の努力も失速し、「今年こそ」の思いは、いつの間にか「今年もまた」に堕してしまうのです。

もちろん、こう申し上げるのは、世の常としてそうだということで、真の実践者であれば、そんなことは

あろうはずもありません。しかし、私たちのほとんどは、まだ実践途上の人間です。「今年こそ」と「今年もまた」を繰り返しながら、より善く生きようとするほかにはない存在なのです。

では、せっかくの「今年こそ」という、この心が浮き立つような新鮮な思いを、なんとか持続させる方法はないものでしょうか。

それにはまず、目標が自分にとって理想的な素晴らしいものでなければなりません。なぜなら、自分をごまかした中途半端な目標では、やり遂げようという強い意欲を持続させる力にはならないからです。

理想的な目標を設定するためには、常識や先入観を捨てなければなりません。常識や先入観にとらわれると、新鮮で画期的な理想の姿が見えてこないからです。つまり、「できるか、できないか」を考えるより先に、自分や家族にとって最も善い状態、最も理想的な状態を、まず想定することです。

幸い、わが会の皆様はその「最も理想的な状態」を知っています。すなわちそれは、「我も人もの仕合わせ」が実現した倫理社会にあって、真の仕合わせを享受している状態です。大自然の摂理のままに、最高善を最優先して生きることです。小さな善や個人的な欲望に振り回されることのない、本当に心豊かな楽しい日々を送ることです。

もちろん、皆様はそのことを十分知ってはおられます。しかし、それは実現可能な目標というより、実現は不可能だろうが「そうあるべき理想」だと感じている方が少なからずおられるのではないでしょうか。心のどこかで、倫理社会はタテマエ上の理想郷だと思ってはいないでしょうか。もしも、実現不可能だと思い込んでおられるなら、そんな目標は立てたところで実現するはずもありません。

さらに言えば、実現不可能な理想は理想ではなく幻想にすぎません。幻想を目標にして努力し続けることなどできません。実現可能な確かな理想だけが、人をその理想に向かって駆り立てるのです。

もちろん私は、倫理社会の実現は、十分可能であると考えています。ただ、その理想を実現させるためには、一つだけ条件があります。それは、大多数の人が「人はみな仕合わせを実現したいと願って生きているのだ」ということを、しっかり認識することです。この条件さえクリアできれば、もう「我も人もの仕合わせ」が実現した倫理社会は目前に見えています。

「私は」ではありません。「人はみな」なのです。「人はみな仕合わせを実現したいと願って生きているのだ」と知るということは、「自分の仕合わせを実現するために、他者を犠牲にすることはできないのだ」と知ることでもあります。

「大多数の人」がそう思うこと、それは実現不可能なことではありません。私は、それは必ず実現すること、実現させねばならないことだと信じています。なぜなら、それが実現した社会こそ、人間誰にとっても「最も善い状態」「最も自然の摂理に適った状態」だからです。

では、この理想が常に新鮮で、私たちの心を高揚させてやまない目標であり続けるためには、どうしたらよいのでしょうか。

まず、その目標が必ず実現する、実現させねばならないと確信することです。そして自分が、日一日とそれに近づく実践を行なっていると実感し続けることです。すなわち、日々に今日一日の実践を誓い、それを成就させることによって、自分が人類すべての理想に一歩一歩近づいているのだと実感し、それを喜びとして生きることです。

私たちはふつう、いま行なっていることの意義をことさら意識することはありません。ただ坦々（たんたん）と食事の仕度をし、部屋の掃除をし、あるいは職場で業務をこなします。それが「何のため」であるかを思うことなく、日常の決まりきった仕事として行なっています。会の活動にしても同じです。自分の役目だから、上の

人に言われたから、ただ真面目にこなしている、という人が少なくないのではないでしょうか。

しかし、それではいけないのです。どんな善い営為も実践も、それが日常の決まりきった仕事に堕したとたんに、新鮮さを失い、仕方なしに行なっている単なる疲れる労働になってしまうのです。

私たちは、すべての営為と実践を究極の理想に結び付けて、意義あるものにすべきなのです。家族のために栄養豊かなおいしい食事を作るのも、家の環境を清潔に美しく保つのも、職場の仕事をより善く、効率よくこなすのもみな、究極の理想を実現するための実践だと常に自覚するのです。すべての営為を「我も人もの仕合わせ」という理想に向かう途上の実践として位置づけるのです。

人はみな、仕合わせを実現したいと願って生きています。私たちはそれを知っているからこそ、おいしい食事を用意し、家族と自分の仕合わせのために家の環境を整えます。職場の仲間と自分、そして顧客や社会の仕合わせのために、より善い仕事をしようと心掛けているのです。

このように、すべての営為を理想の実現と結び付けて意義づけることで、私たちの営為のすべては、その瞬間に新鮮なもの、意義ある実践に変貌するはずなのです。この一年の三百六十六日を、日々新たに、究極の理想の実現に近づく実践の日々に昇華することができるのです。

これが夢を持ち続け、夢に近づく方法だと、私は思うのです。夢を持ち続ければ、必ず夢は実現します。今年こそは、「今年こそ」がいつの間にか「今年もまた」にならないように、毎日を新鮮で素晴らしい日々にし続けましょう。